

量其袖草紙
下

^ 5
4629
2





門へ5
號4629
巻2



昭和十六年一月十一日寄
尼野貴美氏贈



浪速 花屋菴奇淵按

元禄四年

湖東を名産よき紙ひらへ

三月廿四日

大付弦の子れくく一色い何仏

猿蓑

何ふお東成り

芭蕉

梅原素中この言何とろけ
とどわたらしれまけあけ何の乙原
雲花吟小田よ土丸ら以系華 珍碩
志とさ移入て下これに云 素男
行隅よ去遠くくえて言何方 初



二階の客いたくまたる秋
放やる鶉の羽は見えも世
稲の葉のひの力ふ死風
栗んのもうりめに越る秋
内庭にうと鳴く鳥は北
卯の刻の箕のまはぬ西
そとたる松のまはぬ男
秋の札を死の札は縁引
雀うごころ百舌もれ一
懐はもみぢあそむる秋
ゆるゆるぬおの海つ
陰の柄はまをうたう去
灰すれちる流し菜の跡
妻の目はは替て帰る経
正男

合

店屋もの滄い供のみ
仔細のまはぬ糸半残
うらせもし難の下土
大膽と思ひくつまぬ
身はぬを紙のとりふ
小刀の蛤みふる細工
柄は火ともん大年の
うらもしい思ふたうも
胸うちあいせまとう
は夏もうれめ城をる
勢は祓させてまはる
嘆声の隣はちうた
流ははそ入日とこく
死なきは後とあらはる
嵐

雪雪ころ井の割下結
花よ又ころけれも定らん
雛の袂狐そむるころ風
史邦 野水 羽紅



山里ハ万葉あそころうりの花

ころころふる雨巾二葉の芥子苗

長風よころころを雛の羽の尻

萩子

ふ性さかかそおころれしは雨

連攢

山巾巾字法の猿註の匂ふ時

るは水清き

けまが池にのくこととてら

子奴大竹糸まもる力有

うたふとさいししめせもさる

落梓舎 二カ

柚の花よむりけ馬ふ料理のち
五月雨やまき安へける壁は雨

猿蓑



凡兆

巾巾ハおのふほい巾まひ力

あつししととけしけしと

二書州ともも采と種に出て

灰うちたたくころるめそ取

け筋ハ根もえさしは不自由さ

たといしししにせ死服指

草むく小蛙こはうろつる

落の芽とりよは行蛇あり消

及んのかころハ花のははむ時

まうくは紙をけ出て此の墨が
浪化
歩け落れおろろの人とて
芭蕉
かこと此世のふとさふし
之道
半時ほどおのかりたる人
夫州
火のたもくしと燃てや、を
支考
軒口の鳥居のほろ晋請
惟然
足才ともう足をあらむ
野童
切り立て畑をくた丹波山
野明
そらしと出をせけり
未
春、合、録のまきぬ法斗
道
はうり様けしけり
時
ちくしと風呂をさけて
者
らそくしとやとく
春の象
然

砂川のゆく流るる夕方
童
志とれしと流るる
明
百はく入花の本
道
菜種おほろよ西
未
比寺小楞嚴より
草
持場のこと本れむつ
考
相の内むとこに馬
然
燦はさあけて汁
童
羽子板の寄て一
明
僧上まゝて毒
道
紫小段と結の十
未
色紙のよこと秋
草
けくア方城は取
考
まのり畠のつ
然

兩手にて神の度りのこりしと童
ふり出まらるる市の小屋掛々
はこゝろの化物屋にちりよりにて道
舞し買のふなる 杖持考
市局の郷下りてい細くみ
塗と箱よりおの出—入 養
花の香のまじりくやまぬえらり
目こふ一日ものさへはり 明

俳諧集



本をまじりてに拓きて
たまらぬ家風を

ひびくしとあたる扇やをりし時

芭蕉

青葉ふはちはく文意の 禱

安世

濃城を以て舟城名跡よて送て

支考

それして家風造る原中

空牙

力の執をぬきれ拘りきて来り 土龍
大うと快のち成さうへなく 丹塗
傘城をほりて戻る下記の筆 芽
雲うらみり人のえ 竹 蕉
さうとくとお成さうと連と初 世
おろめりやうと心海 際 考
いふにん成付るおましと 野
志向の風よ顔と吹ふく 芽
よう把るむとこの居る操 蕉
そらく江戸のま引ぬまろ 路通
ちつとの事と校部うはく
力花成紅のまよか—とやう
あゝ成らうとや描さうり 野

石塔成又よし今朝と出
 肖土ケ伸たる悴き所かよ
 古くめ人形仲間あつてふる首
 豆端出ーてさういぢりる
 緒帯小鏡ととて穴うけ
 名深の町の辺付もなる
 所方の旗またたてたる冥東里稻
 ことーいさう後るあらじ
 菅葺いあらひくと詩の秋時
 いつ作りても詩ハ上よあう
 女房またく笑ひぬそ悟しそ
 瓦しれ武士の二番くくも
 土の筋の紫竹は枝ふ切なる
 岡の草時よとやる富士垢離
 野

故の居れをよもれておひ夏の有
 酒一斗と名成付て吞る
 病ぬいて結白まある花を
 とちりへ向くもそのいそり

俳諧集



秋立てて于凡くは雨気これ
 表居ふよえて戸然とど有力
 早稲葉然を今仕共用もか
 人よりとあるこの紋下作
 照撫もさひく又ある田舎様
 さうりつふれーけこのの風
 畚掘て艸のこけらと接ふ人
 らん子氏の髪もたよす道
 居あふふ雑炊時のゆるるれ房

及肩

珠碩

之道

正秀

探志

碩

道

房

雷おらる娘うあゆれ 秀
かけて至く合羽の糸たはに 道
肌きくと博奕くくくたる 碩
力の筋酒よせいらに近うえ 秀
菜花前かうと寺の雁人 志
上張よ鶉ぬをむ白のうけ 房
日和よむれーそおの朝明 肩
どりしと掬板ぬく花堂 碩
あひつれたるまの川草 道
幅度ま砂川さるる吉岡さ 志
羽織そろゆる溝さうと 肩
行うと朝起あぬ五六日 道
茶花休む冷おの味 芭蕉
母親の仕立てえとる嫁入りおま 秀

鳥よとー出る因おふふし 房
江戸店と持て在ふの門さ 碩
麦成養る香よ咽のうさきし 道
股川の方城曇にせうられて 志
背の小石に苔井生出る 肩
志んしと國の仔も屋のり 秀
くく成告る秋のひよる 肩
山畠の本新くさつく風の音 蕉
石地の坂とつるまや坊 碩
懐強さ亀井の大工新し 道
かこ死と妹を奈良の潜上 肩
野の度とまうし花を植ひ 秀
かうしとまのあけはの 碩

俳諧集



蠅ふらふとやそ山秋の目救え

素

葛のうら吹性子の

皺 芭蕉

小灯とさつゝぬ秋よかけ捨て

路通

泊して来とる奥の

脇 大州

一通り又それとる朝月よ

惟然

たぐそとくくと器中打とる

来

おあけてまはまぬ人と思ひの

蕉

よ水はうひよ出る面うけ

通

お月一のとつれかりて危くれ

草

泣そろへたる芝の小さくれ

然

夕る言とせざる落して立り

来

泥うちとる早乙女のとれ

蕉

る佛いつれ久ぬいふうり

通

牛乳骨まで牛乳らとる

草

下八

酒の漬かそへ上へ酔ふせり

然

室の八島またつひと

来

陰奥い花より月のさゆしく

蕉

啞のまゝ似とるこちの雪

通

候ぬの友とほりからまはれ

草

我小力よ志むる巻

兼 然

おりの惟とと空に臥して

来

疹しととる泣の女とよ

蕉

斤定はく拾ひ流身の古竹履

通

あを能入と雪よ啼く

草

供多のくはましもかた

然

畑の中よふる稲

はま 来

くはま井と懸遊がゆり

蕉

ねる鑿のええぬあけと

通

やけりけふもあうたは教へそめ
所と廉の介面にあふぬ侍然
子規もよ／＼とて通る／＼と
／＼の中よ下ととや桶蕉
けつも斤例斗りまそらひ
含芭何とく落葉のうへ
俳よいか／＼の花城奉る然
菜城はむ髪の白れ曙未

星合集

牛部屋よ故の夢よ／＼秋の風

芭蕉

下樋の上よ蒲萄たかほろ
路通
酒志ほろ宗ふ／＼に月くれて
史邦
鹿口みふとふ／＼と／＼と
史草
くれ井にまき／＼と／＼とみ床
去未

下九



蓮のすきと葉の糸からに 野意
ッ
炭扱もす／＼と新らしくとつれて 正考
北村の楽はねむそとと 蕉
休も日も癒ふるひの歌よく 通
篠くむ鼻の隣いふせよ 邦
かま干かなる衰や寂寂は 草
い／＼も病／＼の秋の下枝 柴
秋立て又／＼と／＼と 查
落緑た／＼と僧堂の 秀
かふれかたか／＼と 蕉
痛／＼と／＼とて浮世／＼と 通
あふ／＼と／＼とにふらぬい／＼と 邦
畑ふ／＼と／＼とまそ 華
人々左陸の圃いとえ／＼と 果

産月すくもろき 竹童
う紀事孤過井上流る隈も 秀
狛買 客のこころ衣し 蕉
硝子と減り際足ちる茶酒通 邦
摘嘆いむりー泣ふく 邦
叢と麻ふらちる川所僧草
明るの雫の太鼓赤出次童
太いといほーやふる船あし 秀
ちうしに似せぬ磔ういふ死 通
ちるされて女の中れ青はる 蕨
殺くられぬ志のひ路の力 通
匂い水きこるくちうて初嵐 邦
中こと鼈のこころら進ひ出を 草
みに持し抱えまへいそがーと 珠

油あけをぬるやせたり 童
鶯の花よいの麻とちうて 秀
柳を風のたをけそ吹 秋華
座右銘 人の短をふくれん
己らもかゝることふれ
このいへい唇をー秋の風
いふつうにさうぬ人の言さよ

藤蓑 九兆
灰汁桶の糸やまらうけりしを
あふかかちうて青麻とふ秋 芭蕉
新巻あふしたる力糸と 野水
かゝる娘ー十のころつ死 去来
千代死つとあはるの十言しと 蕉



うらひまの青い鳥の羽をふら 北
きり出して朧はあやう春約 未
厚耶ら言根はをれくさる 水
ク飯よかまをこ喰へん風草 北
蛙の口をさうれて意味は 蕉
物思ひり入らうをれて休む日 水
正せししに殿のりのぬき 未
金罫と人よむを身れをさ 蕉
その風岩ぬきの青い(の力 北
町内の秋もふけり明やし 未
何と云らるるもあまらうし 水
花とちりる方ハ西をう衣 蕉
本曾の歌草ふまと言つ 北
うらやら山陰はと入に十 水

紫ととぶの株と町けり 未
冬雪の荒小あうたるわら 北
旅の馳をよ有明し 蕉
とさばき女の智恵もさうれ 未
あよあひ牝狼のかく 水
中人力板屋の萱根の街 蕉
人もさうれしうらまの氷 北
うをほきに自腹をせし 水
すこも大事の船ととり守 未
提より田れ青やれていさ 北
加茂の社いよれやし 蕉
あうりの尻声らうをよ 未
雨のやうりの無名速 水
昼行する青きれ身のたうとよ 蕉

赤くろくし水と蘭のそくろん
糸襦袢一ふんまゝにけり
まはらと月曜のそら水
夕顔歌

古寺城月

芭蕉

月をそら屋よりくくれば
庭の梅の葉もこの法とふれ
火捕ぬる窓の子像と身代りて
別当殿の古れ枝折茶
尾既のめてたうつる松小鯛
百家しめら川の水 上
寂寞と系る人ふき茶沙堂
雨の口よりと意取麻とせぬ
一じらふふれてゆる市のま

丁


送うら子の飯つらむあり
いそりしとけうかひ油得
糸糸と踏きてるれ境
力の前あさへて志ひろふ
格授うらやおけうらの生
位高る髪は黄とよ秋くれて
大工の換然いのる辻 官
三石の猿樂やうとれさう
ハットトとまのふに 伴
雁うら白根とまはひらうて
うち系る馬にそくむ襦袢
商人の腰にさしたる綿袷
おととまや系るやらの糸
蒜の香にまうもつれぬ

果さよよる水を月の夜屋 白
 桐の声つゝたる去閑番 蒸
 空を空とさるを空とまはる 白
 雲が故に雲の紫句の風をて 蒸
 といふん細れ水の三日月 白
 たつゝりの蝶よの月れに二里ま 蒸
 さてもつゝる時を、一那 白
 西川のそよの時の夕方雲 蒸
 小草ちりりし遊の遠かり 白
 落雪のちりりして晴たる日かきと、
 水汲ふて捨る月の茶 蒸
 空めて雀と入る羽のくれ、
 打ちけ垣よいろししの蝶 白
 十六夜集



ちりりしと出てふさよふたはる 蒸
 舟があつてはるさよふたはる 成秀
 ひらりとして笑も掛ぬ秋の系に 路通
 獨こそけたる音の世りしれ 夫草
 とろしと睡まはるる雪の碎 惟然
 蝶とろとろとろのさけ 格路
 我ものよふ洲の潮のふた 正則
 石の花表の出付城よむ 楚江
 鶴の森を足すけて鏡ひり 勝重
 雲はらり一日ハ時雨り 葦香
 拍子木よもの冷ふ傍の打つて 鬼苓
 流はるるなる谷の丈竹 正秀
 月影よこれしをさる白の上 則
 たちりりしとさりしと鳴 重氏

鞠ことたは袴は秋風おちうらん 重五
 葉のさく散を今朝又付たり 蕉
 年ししの花ふからひりおた散 草
 死しる車もせうぬまの月 則
 老の葉の下の芥吹吹落し 睡
 さくやく事のもうたしあし 正
 かけさほく又さく内をさして 江
 のくくの心は流れて来る 水 蒼
 汗臭さく人のかあはきをさる 香
 さめてふくも輝き散る 然
 風止て流るやうけさく 舟 香
 只一し月とたのむ條もの 通
 はりしひ右死都の荒のころ 柴葉
 月又とめてふやうと様立 草

秋風は細の岩やくふの電 蒼
 栗ひる糠の夕ア淋しと 睡
 斤論ある子ハられさね於於し 通
 身細ささるの反さるとんよ 重成
 長極は浪土器かたくとた 柳流
 はくさくさく鳴ておのぬふたり 成
 職人のふあしはせる花の陰 強正
 南あもてよめくむ若叶 香
 俳諧集  探志
 市町の消ておきや響むし
 為さしやる庭のさぬ土 正秀
 橋のさく園の葉と影はさくん 昌房
 子掛帯のしめ力ふ死 盤子
 度補のさ履と人よ並せて 芭蕉

すこししたる奥の燈や 及肩
窮屋は顯世はうらやま 壺に
曹城をこけぬ赤うの銘 志
山はこい侍をたしむる 秀
在奇の集哉編かりたり 蕉
出来合のおふるまはん 子
小鳥さかしく 房
名月小借りそこひし 香
新酒の酔のほろしと 紅
残る事ふられぬ 蕉
石のふるふもさあふる 志
咲花のそれよ 肩
傘下せるそ月の雲 房
帰る丁おのうらうら 秀

下

月をよとぬる足弱の 子
見る斗り細よとらも 江
湖水成香て胸よさう 蕉
隈家ハ物静ある勢 房
麻のたうこれく 秀
ひさんとと太靴 志
名砂紙と一ひ屋のらん 吟
みちれくや 子
うらまたりぬき 秀
お紐は男は帯の 房
たろくこい法花あ 蕉
一振の雲より 香
侍福程やめて 子
風船は行ろく 肩

馬よきありては。徒然とけし。江
惟うそをまきし玉けり花吹雪 房
海うしえへしこのころまき 燕



三井寺の内たぐとやうき
来ううまねとらひの力ねあ
後明て力さし入る浮御堂

曲琴亭

乳麵の下たさきおきお

九月九日乙州う一様なる

とてまうらひ

草の戸や日くれとれし此酒

葉の島



路邊

うるうし乳箱の粒ふるはれ乳
雁もともおきに海池の水 昌房
白壁の内より石舟そめて 芭蕉
蠟燭の火城もろくろ力 正秀
たのまれて銀杏の産葉うら茂す 野徑
とくつして乳紙志何とあはれとら 乙州
園書にわおしとたる影敷草 晝好
身い畜養とけあつて悟りし 珠碩
あこほつれまきと秋の空まき 盤子
金堀よ入る洞のこぼし火 里東
田の中よらけし勢の打並ひ 探志
芝居の札の葉集りりふ 游石
御嶽より草葉も不自由は旅の道 秀
おきふ志むる帯の後ひ 通

内新よ二階の新杖つき上うて
書巻の白ひのむせる下積東
かけろふや海もれたの空うこ
東風吹く白る葉水の籠子
花よきの静ふうくねらる香
豆腐上よにあけて客待碩
うらみあるを程杖語りて細心州
思ふれと捨しもの海見通
うねやうふとでもぬる葉杖
汐のさし来る月の上廊香
暮の露思屋の坊主打のま子
これおのり香杖吹くうらる州
うらと夫もやういふふ静心碩
あつとさういふは世を庵の念目兼

ほととねを奇縁に膳杖担きて好
扱のるよのひる争の藤徑
書ハナク川三史文通くうし通
吾縁かーやるを杖くく縁刀
おさへたる崩杖後又えはら房
まよ履端こむ居風呂の漏子
内裡とら日とい左衣をた花初碩
燕の出入賑やうぬ声徑
後張集
香杖すねとて
静ぬほととねの時よま風根
火とらうつとるよを杖くくいも如行
一年の仕事をまにまにさゆりて芭蕉
恒中入母とさういふとあり荆口

針嶺

うちつれて弓射よ出有ぬ日 文鳥
山々霧とさける小坊主 此筋
秋風は鍋くけ後を長いる 左柳
雪の上と草鞋てふむ 如風
幅幅の喰ひ破りたる 翠雲行
念佛の声れ細う守ゆる 残香
別を人と冷き小袖あためて 千川
推ととちの慮のいとあき 蕨
奥住居留もれ表は 冥紙志行 口
茶着さうして抱窓にけり 嶺
鞍おろを馬ハ丸雪を女拂ハ筋
悴は力の疲て出こくる鳥
く川をの糸も菴仙せと 蕨
目利てまを送るくく 柳

下大



萬世系のおもてえせんけい

千川を

おくに伊吹城とてや冬さうり

俳諧集

白雪の三人の子に松花松花と
名をわてい

それ白ひ松より白し水仙苑

芭蕉

土巾ワラ平のあしぬうと雪 白雪

朝うは角あつとまのよまて 桃隣

とやう世分の吹こころん 芦雁

洗濯のいと梅とまらふ青坊 支考

お鼻ふもくはさりくは鏡 以文

扇ふはさるひ糸めと後を押し 扇車

何洞やう鼻声 下 淡水

別路の出く川とる小橋うくる
 桃先
 萩いとちりり作山小出と
 桃後
 水汲とよ月こきしれうたをぬて
 桃鯉
 雪丸
 花とくたあまき坊まねのねひ
 雪
 額やふれたる白きまの右
 蕉
 穂の追ひまてゆるはれあり
 水
 茶もろく吞てりふも様立
 考
 其あるまはうとた化糖のふまけ
 之
 二月の離のとけいつけもない
 先
 たもろくた庭の半たけやね
 雁
 小細と籠のとれるいせうぬ
 隣
 馬蹄の漢もかきとれつれて
 後
 雨ふふらふを西の流とし
 丸

下り丸

新法なる例よりふく日城塞
 松葉の埃よ煮る禍蓋
 蕉
 維子笛城首よをたる物の仇
 雪降ることてりふも鳴流
 隣
 小こしと生死温祭の夢さて
 考
 院もまきつ繁城院ひほひたり
 後
 ちりりくに鶴鳴ぬくはあの方
 丸
 次子の磁ハ下よて持こそ
 蕉
 あのぬいとやう新酒と後を
 之
 馬紫とる門の牛
 雁
 于おの庭ゆとる一しれ
 先
 萩の志こくしてまね小時
 雪
 咲く花よ柳まねくら成指流
 車
 村城とさんて肥るる
 水



風林寺の巻

秋意一ひのしほくも懐懐ふ

巻四

宿うして名残名めする時雨

と秋成終て草庵よかたれい

門人あつかりあそいふ

とよま

ともかくもあつてあつたの指尾

戎儀所賣と傳と色ふり

夷儀家鴨も鴨と似たりりり 利合

元禄五年

巻五



芭蕉

昔弱しうハ賣うとてふか

吹あけらるる東の雪とれ 嵐雪

帰る鴨とくぬ鴨も澤まで

七曜山成出くふは記 蕉

町作り栗の集たる所細

を露も窟く溜る馬の血 雪

坊主も老もいと以退たて 蕉

土の飯はく林幸かまじし

生條と燃はくもふり雨と如 雪

目覚めて跡る拙う切うけ 蕉

ま白ふ塩ふさ飯をわけて 雪

かまこに顔かよと眼 葉 蕉

舌根の念佛と瘦る居士 夜 雪

小塔ハ稻の中ふは川 立 蕉

わら馬力おしと唱ておる、
風も吹くぬふ釜の蒸れつゆ考
哥の舎海つら時肌きき、
養子の若も居る侍、
ふくしと音とあどすんを、
尾の若もい徳願成就、
二三年たつのはあれそこと考
髪城もやーてえ遠る歌、
片髪ふハハハ附るこれの方、
機をる指ハ角力えの事、
何ふの田ハやうての写を考
あめ々の星のうとまのあ、
所供よ常陸の助も花もろ、
白いはくしに卵の飛入り、

下

かけろふの傘于例にもえに考
ふんばとをつて人の名は向、
本後う出れいおのしかり考
全城あして後をほき、
松風のとんしと吹あする考
控ふらあると告る門番、
湯い水のやうにあつても水桶考
馬を足よ苗ちかあつら考
小洞市の時うらみたる奉人、
痛らふぐれハ女房うも、
むらに涼しい方の合つり考
あめ板うら板うらら建、
二の丸の光りややく金鹿風、
雨もたうて本の朝日、

さうしと茶漬の飯食は迫
に上りて返と 雲
氏神の花も盛りに咲き
香居成之えて伸る青柳



猫の意やむとて国の樹力
起しし口つたふせんぬる小味
鎌倉を生て出らん神ころと
五月雨や整ころう入来のこ

吾の淵が成うやむ

字石形より直探のまやたしり

まき堂の母七年余り七くは終月

七月は寄す数万五七程

七株の萩の子や月一の秋

てん

星のおよ花史細く後禱 其角
りてたとや星の一枚もあさるも 素堂

深川集

深川夜遊

芭蕉

青くてもあるさきもの成る
抱ておもたさ秋の新湫 洒堂
昏の力極の本郷斤よせて 嵐蘭
坊直りしらの是に立るく 岱水
松山の腰はけししの咲やう 堂
焙炉の炭とくさす川 舟蕉
いとひ月のぼくへさる小豆粥 水
ふをゆ搦んで洗入油子 蘭
掛とに糸のころろ成持せや 蕉
雲蓋よりそろう下加茂は表 堂

名方や竹よさよとむけりら
十奈よの小粒にやうぬ秋の風
許

深川集

酒堂



河株や水田のうらのらとせ
昔うくは日よ代うへる雁
夜うり 蘇い馬のきうて
糞軒けふる道のううさめ
右哉場力も志のよとみ後
去うへえ返る我客の笠
さうけの門の柱よあきて竹
雲をのまの壁よ入る虹
巻葉よ肩休まうとるり
水仙ゆりる房初の傳ひ
蘭

下

十六夜集

芭蕉

幼草や中よ日敷ぬ秋の露
青丸よとよきにこもる谷川
野もより居村の習地定りて
さうとむ力よ蓋瓶の蓋
塩附て餅く入程の州
ふてこいも草の引も
年あつた土持ゆるをゆま
飯防の房湯よ洗うるれ脊
糸糸の葉成たて星石の上
中さうれとよ笑る梅
凡つ折のふらんよ暮ら丸く寐て
物中よはくると足青
月あはれ雨の降る止む星のり
史

早稲の俵はほりくかり 豆 嵐
狗虫にゆく乾く秋の風 嵐
番は赤子成りたる小坊主 史
花子の赤と見えたる土まじり 半
細き井溝状の月る若船 煮
ま風は又ユウ由る様芝居 嵐
のこはふらと伊丹もろ白 嵐
琉球は神島等の表之 煮
是れこの際いあらん物 役 史
足知りきて近付けり本考は 土 半
喉入をりしや 唱 又 引 嵐
袖ぬらに深きいりの盆 煮 嵐
月もさひとさき油の糶 嵐 史
竹末と百石とりの門 煮 半

下

公事よ負たる奈良坊方 煮
傘といろけもあへと俄あめ 史
又る月も異一牛の目 煮 嵐
出店へとも隠居れぬを 半
于物つきやる精進の朝 嵐 史
も松のまねてまどとつめり 煮
駈居とろさこむ板敷の上 嵐 史
人ほく毛利細川のたぢり 史
聲も賢なる雑の勢ひ 半

韻塞

十月言許六亭



ふふふふ人も年九初時雨

芭蕉

野ハ仕付たる夏の日に土 許六
 油美哉賣人小粒の吟味して 洒堂
 付の煮えたり秋の風も孔 岱水
 者の力負へ入不と右たみ 嵐蘭
 先ユまをり蚊屋の釣やう 瓶華
 ちろりの傍中 小粒の吟味して 水
 蝶は正世の系をにのりて 六 蕉
 轆轤^{テカイ}の目る系良の合口 堂
 守分の鑑ハぬ人もあしと 蘭
 舩追のけて蛸の養ありと 水
 霄園ハあふふる秋の系は 蕉
 小より萩の風をよれ立つ 六
 八力の鑑ハ中より小服給 堂

下

燒山こえのそれ赤ちけ 蘭
 赤歌を畑と花の本法とて 水
 けりも長保よ鶴の卵より 蕉
 美ふつく隠者の室をふじや 六
 當摩の懸城酒よ酔とる 堂
 さつとろと籠へ奉りて 蘭
 ねえたくと玉く長持の上 水
 灯の歌めつと死甲 侍 蕉
 山時多 平子紙出る 六
 旧達ハ能の志く焼ゆるとて 堂
 尻月よかよと梨女房 蘭
 いらやう般無も志りて 水
 琵琶城うくえて出る如く 蕉
 五明ハ毘沙門堂の小方丈 六

舌のまじりぬ狐 やしき堂
一とちも青死葉のふり落る蘭
藤踏と下る宮根路の坂水
不長のうとす白もふての添煮
茶磨たりかむ百姓の家六
これのまやりのてとる新茶葉堂
七十の賀の若菜莖立蘭

深川集

支梁亭

口切は境の庭をふつー

芭蕉

牛の子えとを藪の初夜 支梁
ふらふらのまは後へつたけしは 嵐蘭
秋の野るのさのしひの形 利合
旅人の影一二月の明もろ 西堂

下快

大戸成揚ヶ小出る線身 岱水
ウ 鶉の卵のうと成産そろく 桐實
あつたふ指を踏とむるも 也竹
みとうさび六田の柳何と撫て 梁
幾葉まきりくす大豆の汁 蕉
細うふるもはもまは境の野合
程ふくくるや傍の 椽堂
さうしとと縁着したる空 水
酒ても食まかり母れし力 蘭
りをまの長門の園成秋たちて 堂
を路よ持ち人一椽の 清梁
西日入るまふの産の同さ床 竹
萱の二葉のもえてはのめく 實
とやこと去年のし御思ひれて 会

児ははるる新迦堂のくれ
嘆きめて去のふたより様を了
多のふもこの枇杷の蔭に
凡卑しと積ともふ旅の宿
清けは後連とこゆる社
田さより小細く声は
ととこれ房のふり入川に
氷つきの箱の糸ふ肩重し
とえ黄とたる門前の坂
皮剥の物煮て冷ふ有れ
上毛吹きく白ぼろの
谷つゝい流しきけたる
た刀拵さより二つら
おきも藤さのふたぢり
蘭

下作

盆よ美ふる丸茶の数
花さより御室の路の人通り
麦と菜種の野ハ綿と合

深川集

音仰じしを鑑う客煎茶一斗
五件下戸ハ亭主の仕合ふと

洒堂

洗足又客と名のはくをさ
綿籠ふらぬをむさこれ
まいさ候七草もた川
力のよ氷もこの小紺賣
築地を保よ典茶の
相国寺はたんの花は
椀の蓋とる藤よ筍
西衆の茶堂はく茶函から

嵐蘭

堂


蘭

蕉

堂

むう一咄一ふ好鳥位とる 六
さぬし一い有れ備の福成とる 燕
東 退子の力を説きとる 蘭
青岑の板又宿を露れとる 六
ふとりの柱杖跡とつとる 堂
系うけの枕打志とす朝ふる 蘭
汐さうかほ星にれ指 蕉
村い木田而のまれ青と立 六
塚のころひのしゆるふ系 堂
虚を僧の作又廻り又と紫 蕉
今ハ破走一今川の家 蘭
うほりけ後撰の風と詠徳 六
すこやのころふく四国由じ 堂
朝ふかに湯とつとる 藍花 蘭

よこれし徳よがるまれ粉 蕉
馬うく成待とつとる井戸の端 堂
方板又紫成洗と探とし 六
火焼して破あてのふさたち 蕉
中川 積とかくる年のお成 蘭
うのとりと門の尾小を障て 六
さる観音にうく崎かえらる 堂
今とやるま所織ととつれ立 蘭
奉けの陰と誰も伝とあ 蕉
叢垣又本きくまゆる塚の内 堂
日ハ赤う出る二月朔 日 六
とくの花と伊勢の蛇のま初 蕉
狗構恙早く官川の上 蘭

郵懐紙


深川巻

力志ろ残いそくやうの村時雨

千雨

小松のかしらそろう冬山

芭蕉

雄麻こゝの巖の透きけを拵て

此筋

水すつ白く海へ出る川

左柳

洵ろへさ絲の酒屋も一里程

洒堂

襟よあしはむむねとくひの船

海動

おきてふくさむ日あり鼻力兩

岱水

紫ろ陰うろく南天の花

川

笠とれの前髪ゆるむ髪紐掛

蕉

かきこもまよひさび大酒

嵐

高館ハ年穿鑿よあうつろ

柳

水風呂立る雪の降り出

筋

ぬくさ蒸気乳くろまを紐

動

書

傷寒やとれあうぬかせる水

伊豆の海舟流よ船と漕入て

川

一夜の法よ家育定る蕉

蕉

鄙懐紙



荆口

本拵しよりるあふそ死入傷

柳

毛と引く鴨とのとる組板

洒堂

急ぎの中振うに袴着て

芭蕉

ところしハ本履くく及

此筋

梨の枝おりり城をぬいさる力

左柳

桶よととこさ芋売のあく

大舟

秋風よ架こしらゆる巻

千川

嵐のこしたる梁の弓

蕉

六月の月し照るまき木拵の本

堂

手教の入りそる縄ゆるま

柳

如衣袋中りうけて供とる浄土宗 筋
箕面の洲のふらふら山降川
筑ふせの弱きねに紫花陰 舟
依は豆の系族しこく 秋 堂
力代も小らうと置れぬ涼川
子徳いふて馬の呪くも 筋
匠ハ今教ようといぬ花整 柵
夏の上よのほる陽 堂
糸を巾かけうらなす橋のく

栲成就して

ろくろやいりてふむ橋たき
雲て小梁とらむ住居うれ
有花の夏は針たてんき舟入

桃實集



兀峯

水多よ仕いたも城思ろと
白既又よ芦静なり 邑蕉
中級の酔も仄よ捧提て 洒堂
力の怪よ沓拾ふらし 峯
鳩吹も板の裏こほろと 蕉
板の埃も小糸産かさぬる 堂
簾戸小袖はあく紀日の掃り 里東
君いれしふてしこの時 蕉
徒出しと出器ふるふれよ 峯
御念取しと鎌倉となり 東
門し小明日の傍と配り 堂
遊踏ふとくは次垣 緇 峯
山陰城すれよ出とる牛尿 蕉

梨地あけ死児のとけ 鞘堂
名月よき井の搦杖一すこけ 東
今年の茶以少貞崎し代 蕉
花よ来て我名の佛 徳堂
まいかしぬ三輪の人若 東
陽火の危よ搦へる株打て 峯
たぬぬ衣よ葛蒲打呈 堂
とんとりよ娘の後のおねせし 蕉
急のあつれとみよや鶴 胸峯
峰への國ハ志まきつ田後て 堂
英流ハ伊吹てさむ死秋風 蕉
夕月よ花舞下と鈴の音 峯
婿かーはとる質の出ー入 堂
麦飯よ交らぬ飯とよりかて 蕉

F. 世



徳利引とる川舟の 袖峯
帷子よ風もそくし中 小姓堂
明日の返事とさる 智のみ 其角
うつろーとあけ匂いと 似せり 峯
人目よたつし引か くる珠教 堂
一息よ地を控視の 花さう 角
膳よ日のこととまそ ねりゆく 峯
常ハはころの石よ いとひ 鳴 堂
累且帳ととれあ ける 角
句兄弟

十二月廿日 昇真

芭蕉

およりて花入さ くれうを 椿
海こひまうれく けり喜の 宿 彫棠
目よたぬに けり喜の 宿 晋子

羽織のよさふり 雲 緋人 黄山
夕方の及ふさけふるか人 柳眉 桃隣
出づりゆるととて 秋をせし 銀燈
阿小成る衣いひゆる 樵の香 棠
肩てやーなり 山加 果の 親 晋
笑しとよ 菜種 外てけた 杏
茶と煮て 止を 伯瀬の 字 寮 蕉
下張の 反古 又とく 枕して 山
洗めたい 猫の 身 成ひ さら 隣
ひつーや 猿よさー 止 ぬれ 魚 棠
硯法 夜と 急 布 せう ぶく 晋
^{一夜} 昼の 雨 窓の 方 きて 履 主人 蕉
三寸の 残 己 成ー たい 唇 隣
才一と 違 さま ちや と 乾 の 力 晋

蘭と 菜種 に きさうる 瘦 棠
夏ふる 和 尚し 女 成 り 暮 杏
高きよ 水 成 上る 箱 戸 樋 山
山寺の 水うらふ けい 静 なる 蕉
眠り かくる こと 合 飲 の 下 園 晋
うけむい 採 庵 座 の けい 山
たし ぬ ぬ 又 唇 の 竹 待 杏
氣とよて 曹 洞 宗 の 寺 町 又 隣
集す 暮 ふい けい ち 成 やく 棠
了ぬ ふうの 主人 又 急 成 り 暮 晋
ととよ 才 分 かく こと 金一 蕉
松らー 記 聖い 皎 けて お 村 方 棠
涙り ちー ちい 声 いく 記 石 山
松茸 成 近 々 路 ちー ちい 山 晋

そくさいふ子ハ下(にあり) 在
老たるハ柳 蘆より外に畏り 菖
花の名よく(こころ) 揚貴妃 棠
附(こころ) 城中にこころ 柳好之 山
こころの 氣の 跨く(こころ) 弦 隣



小傾城(り)てふるん(こころ) 竹書 晋子
既中(こころ) 小傾(り)の 董物 漢石
吹(こころ) 往(り)の いた(こころ) みる(こころ) 芭蕉
か(こころ) ころ(こころ) に(こころ) け(こころ) し 孟 普叔
義盤(り) 既(り) いた(こころ) 小(こころ) 弾(り) 市中 盤子
いつ(こころ) も自由(り) 出(り) 湯(り) の(こころ) 水 史邦
井(り) 陰(り) の(こころ) 系(り) (こころ) に(こころ) あり(こころ) 小(こころ) 方(り) 去來
胸(り) とう(り) たる(こころ) 早(り) 霜(り) の(こころ) 朝(り) 風 文州



恰のい(こころ) ころ(こころ) か(こころ) ひ(こころ) あ(こころ) れ(こころ) と(こころ) ー(こころ) れ(こころ) ら(こころ) れ

え禄六年

人も(こころ) ぬ(こころ) め(こころ) ち(こころ) や(こころ) 徒(り) の(こころ) ー(こころ) れ(こころ) 極

去來のし(こころ)

昔(り) 霜(り) の(こころ) ー(こころ) ー(こころ) ー(こころ) す(こころ) ー(こころ) 極(り) 花

春と秋集



曾良

衣裳(り) して(こころ) 極(り) した(こころ) いる(こころ) 句(こころ) くれ
蝶(り) け(こころ) ー(こころ) ー(こころ) 入(り) 口の(こころ) 松 喀山
掃(り) 去(り) て(こころ) 消(り) る(こころ) 雪(り) を(こころ) 名(こころ) か(こころ) ー(こころ) ー(こころ) 人 路通
石(り) の(こころ) へ(こころ) 月(り) へ(こころ) 墨(り) 成(り) とう(こころ) ー(こころ) ー(こころ) 芭蕉
月(り) 移(り) る(こころ) 名(こころ) の(こころ) ー(こころ) ー(こころ) 死(り) 踏(り) 去(り) 山
の(こころ) たる(こころ) ー(こころ) ー(こころ) 独(り) の(こころ) ー(こころ) ー(こころ) ー(こころ) 羊 畑 良
鏡(り) の(こころ) 子(こころ) ー(こころ) ー(こころ) 待(り) 去(り) け(こころ) ー(こころ) ー(こころ) ぬ(こころ) 秋(り) の(こころ) 風 蕉

いっね條干を空の面^けけ
あちとふく^いな^いたる^い咽^いの^い服^い山
寺の物^いる^い罪^いの^い你^いと^いよ^い良
振^い上^いケ^いて^い披^いあ^いて^いら^いれ^いぬ^い火^い聲^い通
聲^いの^い利^い象^いと^い町^いよ^いひ^いろ^いり^いん^い山
子^い仰^いり^いの^い酒^いの^い味^いも^い附^いけ^いる^い良
力^いも^い今^いを^い旨^いと^いこ^いん^い野^い馬^い市^い蕉
袴^い衣^いを^いこ^いめ^いて^いぬ^いに^い打^いち^いて^い通
我^いお^いと^いれ^いぬ^い成^い若^いい^いそ^い由^いや^い蕉
花^いの^い真^い室^いの^い向^いは^い泣^いせ^いけ^いり^い通
古^い栗^いの^い鳩^いの^い子^いび^いも^いた^いぬ^い夢^い良
講^い堂^いは^い傳^いえ^いあ^いふ^いま^いた^いくれ^い山
流^いよ^いこ^いつ^いる^い悪^いの^いの^いれ^い良
形^い代^いよ^いま^いふ^い若^いふ^いは^いは^い連^い河^い蕉

こほろく^い星^いの^いま^いれ^いま^い風^い通
や^いぬ^いふ^いさ^いも^いい^いれ^いん^いた^いく^い不^い破^いの^い冥^い良
植^いお^いく^いれ^いた^いる^い田^い中^いの^い小^い田^い山
ほ^いく^いふ^いは^いや^いせ^いて^いさ^いや^いつ^いん^い通
我^いも^いの^いお^いし^いひ^いう^い死^い世^い一^い人^い蕉
は^い無^い成^いい^いと^いん^いと^いを^いれ^いと^い吃^いと^い山
う^いた^いれ^いて^いこ^いる^い中^いれ^いた^いの^い葉^い麤^い良
持^いよ^い月^い成^いと^いは^い不^いと^いの^い星^いお^いお^い蕉
ほ^いく^いの^いた^いう^いさ^い谷^いの^い桑^い通
火^い成^い焚^いて^い岩^いの^い洞^いも^いを^い乾^い良
圃^い成^いす^いよ^いの^いこ^いと^い頤^い孔^い蕉
お^いと^いろ^いぬ^い祖^い父^いの^い自^い髪^いを^い氣^いに^いけ^いて^い通
折^いよ^いの^いせ^いら^い草^いの^いく^いり^いもの^い山
入^いて^い余^いよ^い野^いの^い花^いの^い奥^い蕉

いづれもやうまれきり山

俳諧集



五人技持とてきこる柳の

野坡

日うつしに雲の 青 芭蕉

猿皮の力成ちうに山こえて

そとく成りける維子の勢ひ

下たかうあてもあけぬの意

徳利はひいて酢を買ふり

丸三年慈うく猿へ慈とて

境の云事は今ふ地せぬ

ま白よ松も拍もちの真

うた世の屋とたえて後

瘦腕は粟と一曰橋は

下巻

菽入をよとなふられては

鶏皮も頬うろろ秋文て

羽うちこいを雁よ有乾

はしにことし酒成試ふ

ちうい佛へ朝のと月一欠

嘆く花よ十府の菫菫あそふ

もや茶畑も摘りけり来る

さうしとよとまぬ水にまの風

陰の平よゆ入日ちら

けみよくせよと子供を白眼

やき味噌の灰ふきとひ

一握りくまあつり届

りふも松雪のそろうと除

お齒黒ともらひは中戸に配

ひうしの栄耀今い若よやじ
市原にそこもつとかくいふ
外おむよいあうそうとい
力教よ小春仲方の誘ひつれ
蕎麦うつををほむる肌寒
とらしくと桐の葉ふるま水鉢
書付てあう金の積古日
漸とうたおこされて髪けつり
猫可堂ころる人を急し紀
何の花のさあしぬえま有ま
帚同のうつよきしの燦
俳諧集
水音や小軒のいさむ二候
折もととる春の刈 株 芭蕉



湖風

乙切差の前出て
刀の柄まろくふ 状 箱 利牛
食傷の服紙ほしう朝の力 風
昼寐てあそく盆の友達 蕉
小の十人小家ハ本様の名し 桃隣
独一文よ下駄杖借る通 牛
菟弱の色のまとも恥ぢる 蓬
糸のよと急ハ殿の敷 陰 曾良
えんるほとの子たふこと 瘧の跡 蕉
右さる屋ふころ鞍杖はる 風
小さうても砂場を歩く系馬 牛
冬蝨と焼てたれう食その 隣
力教の白も佛の香をえん 蕉
盗人へる着の朝しも 蓬

沓掛の疎不のうふれ雲良
く人も世合よ蒸うつ朔風

鄙懐帝

鳥中

傘ふたにかえたる折うね

芭蕉

つらつらまむむ塚の籠さし
得子

ねほろ力いさこ巨煙のこま
涼葉

後の去よれりてや
野坡

せんたくとてより新のすうろ
利牛

登らまてすこ出と吸もの
宗波

湯入り流のへうま外て海村堂
曾良

夏部の枚のねー合て
蕉

そひこりし度葉の茶室をま
子

く人も果まふきを出てり
牛

下巻

俣野のほれ又夏替はしてふ
野

ねろーろ道人のかほ
彼

金拂ひる月すてい延られを
葉

のほり日和の浦の初丁
良

秋もとや外てはうりし
蕉

清澄たらしは子の髪結てや
彼

在承りうすは出れは花咲て
牛

瓢の煉をとりし麻
子

まのそそ十方それのど
野

ゆ干ふ出もとてむ精進日
蕉

駕舁のいさうハ酒を喫も
牛

先手振ゆる者れいさうハ
葉

いつーいさうハ
蕉

中るうちとある錆のやれ物
野

従ふも母うて来て寤り牛
木綿ふきたた川言其の里
足場よれ方の細尻一筋に子
無退く入夢の睡たそとうり
念佛よ小まに証の対待を牛
比ふ十日よ居あくと泰野
寂陰ハ麦も近たり家柱
岸へたもの城とハハ後賣葉
男子も極む仕を以証の辻野
床入もくや一年の去はと牛
切り採も若本ハこれのう証に子
うけろふ落る思の細流良

高古云々



七ノ甲

西行の庵もあんな家の庭

評古集

持の志のんやも似よ本を此様
うき人の様もふら本を此様
墨指や言もこもたるはや竹
木を此とや言し此味をさへん
其角

炭俵



孤屋

豆のくれ咲は芳麦の縁
庭の水鶏のきる溝川 芭蕉
上張りを通さぬとれ西うり 岱水
そ山とのそけい酒のうら中 利半
庭ふよ誰もこ膝も居ぬ意者 蕉
とわうと堀のころよ秋風 屋

花見ふと女子とつらげれきて
余のまふく小童たんぼく

水蕉



涼川

とせ成をや風おとく此物等

史邦

予実の後さそ

あこころはやをいづれおろす門の垣

相色やこれとすこわらぬまに

翁草



史邦

何とてやあはれきりしそめと

おのれしと蜩啼止む

外為しやこぬよ力に出にき

帯下はすもとる板の冬

清

三つ

とて酒よむをれ智直うと

栗丸を切る川上のやま史

ふるしと形のねしはる拾ふ

寺よ降きい居る麦飯

雨さて白く笑たる萩の志

祖父ぬらりの紫にとり付

まとしとふる負走神と名を呼て

後馬城かくる年越れ高

きりしと雪ふむ通れぬ

見世城町てとたり出とる

狭捧成を塚の者の侍馬筋

腹痕病のこやりとらゆる

とんまりと苗代めくむ苑の色

光らぬまぬ伴遊にあり

可

治

基

可

史

治

基

治

史

基

可

史

春風よ吹志ほくた装袋夜史
質よ流るる百両の家治
ささくく瘦るる影も化散て可
葉しわくく白を振のおる史
穽土厭離寺とさうく穽戸
弁島ほとくもとの居を友可
うと事の佐後一番よとて治
名右る我えりて我れ子
かちけくわるるおの別よ可
狭とぬらとそ月の力能治
所志くぬの上と風お身にて史
老らしげも送ひまらる見可
とくらとて並小院友の歩り
夏も小舟ふくくひとれ幸乙妙

下り甲正

雨ふれりりとの土のふはひ世
候てかろき家ゆりてけり
塩おは咽りかかるとたさうり
素良おゆりり八重橋おれ
小文庫
帷子の目くはととちり賄戸
ぬき外成箱のことと質
葉の粒小指れうひとか死分て
お市ふ人のたうる夕月邦
木刀の音すへたる石舎ぬき
二階はこれうととと裏板水
寒さう小茶のトと吹きて邦
石所おまはる縁ちの穽蕉
子細工小新着やれかふ肩水

史邦

よひう(せ)しも負ぬ小松魚 邦
肌を尻の相茶のよ合て 蕉
秋入とこの筋氣つくる 水
桂葉は降りたきたるを力 邦
を位よふり寺のいさうひ 蕉
持ふりの新刺刀も清くさう 水
工焚家のふささるるお 邦
花よ麻ん一ふさるる者之 蕉
小姓の口れささるる二 水
牛橋の内よりうさるる氣 邦
馬の糞うく復いさうし 蕉
ゆふさるる洗濯賃成あけさ 水
とさぬもさうり一筋くれ吊 邦
梳く小まねおや一まは守深 蕉

下皇

けあぢかど此日の志くれも 水
衣ねいのそよて麻とら指せん 邦
百里とものうくぬれぬし 蕉
引割し土佐枝木の斤ねも 水
さうりそつれぬ中ハ生うべ 邦
まねはと縁よ金ふた方の善 蕉
とくぬがたはと暗のけし 水
とく新は捨てさるる鹿ら 邦
障子重ぬる看らへの子 蕉
小ふみふさるるをれぬ後 水
二枚三日の終らありのはさ 邦
考つてよーれあつたさうり 水
百姓をむ苗代の障 蕉



老のふれももろくて四十春

画續

新紙下丁のまる時ふりあし

鄙懐帝

仲秋雨懐故人

濁子

名方やけくふく雨のはれをきて
客よ花のたけぬ虫の青 芭蕉
秋を離て屋小定まるるの色 千川
すこ生ふれの酒のころろ 涼葉
病たぬぬ鼻紙おもれ懐よ 此筋
曲走の板の下よえろ 階子
痛人の矢先のけよとよと振て 蕉
養とて定より雪のちうめく 川

万四千六

入口の程飲ましたのひふり 筋
とろり解るるよ 終板ととく 子
舟こそろり狭くい下りて夕涼 葉
怪りよとふに洗ひ椎子 川
伏見まてりふも足袋の履極よ 蕉
飯の強きもらひあろく 秋 筋
力孰よ夏かと思へ鳥帽よ髪子
殿のまの古ひたる 露 川
花笑い本馬の車密とろて 蕉
ほろりもたけぬまの彼風 筋
鄙懐帝
いさよひ ころが園のけめが 芭蕉
持船の垢さるるに浪熟 濁子
近互小難改畠がと付て 山水

肩のそろひー采の坊次 依
又うせい根ふ具照る村ーこれ 子
青菜煮る香の田舎うらり 蕉
あはれこのふと女房お直さね 水
ねとーうう流るる山伏の髪 蕉
若白王子ふくーめて草鞋奉り 子
渡ーの舟てまのなとせ 依
鶺鴒の巢に赤と改の重りて 蕉
とけあ曲輪掃のこを味 子
梅の枝下ーのひたる言れ力 水
映すら傳る後のやぬ入 馬寛
飛くう住ふるに右城きりけり 子
うらう果てや琴ののころ 蕉
都うう十日も遅と花さうう 曹良

下ノ里

丸とたてうろ揚法の茹物 水
年礼と卯作の卜人よき縁て 眞
烏帽子うらまは元も隠る、 蕉
持つをぬぬを刀と右にかたり 子
よれハ踏たる馬のめり髪 良
菱川やとや肩の涙と踏ちう 涼葉
通祖のやーら力減えらる 子
我急ハ千本の芽城積とまね 蕉
雁も大事ふくけり又 葉
肩能るをくく似よし水鏡 子
大原の佃屋里うらーに 蕉
お多く懸念けハ牛も富貴へ 葉
冬のみふとにふのしう成釣 子
お時雨六里のね代傳ひきて 蕉

老らわすちのいつたたや
相とととを窮の記を麻是子
菊ふらハ雲車にまきこた山葉
くる風とくは谷の細布子

山葉

秋風よめて悲しと葉の枝

嵐葉の孤心孤思

羊の子もとせぬの秋とちと和 其角

其角と和

入力のいとハ机の口隅うれ

鄙懐命



行天

十と板たつつ文書むりりれ 濁子
小神の棚のくくれ落 香 曾良
焼飯は凡の粕俵にあげて 芭蕉
狂胡麻のちりに四十雀つく 史邦
雨まうらまの于及のまう合 杉風
漢うと流を風呂水水 岱水
さうまともや相うけにうらま 涼葉
幸もとりハ粟拾の冥 蕉
ね板ととさみ搦由る寺此門 良
ひとり娘のそこのしら一 子
葉のふともかくとぬきとして 水
たつとくうらん様落るく 蕉
うは力板麻の衣の影はし 邦
空十の言ふ新 剗 秋 風

未度城打よかけたる紅豆の菓子
唐う地こらふ斤器の食つて
汁と華成りしむる初たよ
常啼て旅よまことくら
藤葉よも指と動いひと水
中庭ちかむ見り膝え蕉
具豆よよ庭に夕紅坊
顔よハ似せぬ櫻枝のぬ
さうらふる隠居の牡丹えて風
誘こつて出るを舟よ子
望情しむ教の近きよ美し
足ハむくきては糸けり
よこれたる衣よ襦袢装打され
伯母の泣き耐人の魚

下ノ里

うの力ま枝の梨の枝りけて
枝もく葉の折るもいよよ
を庭よ小土とそけり水音
くく細目よめり青屋良
初庭ハおもひの糸に安うて
借る扇風を返と夕言風
美小よもれ成かきり弓室
也や鎌倉の道の若州

素堂亭


寺師の宴成神を月のみ
借るく小枝菊枝
もこれや庭よされる履の意
葉の気味やこころ境やの中
桃蔭

抽のつちや記あつたるごとく此が 其角
とく留まらぬ家産然しうさり 馬
八尋のるやあはすつとく此が 佐圃
何矣のかこしにきん菊の枝 書

竹田老人よ素琴が作て



うさりせぬ契やはくぬ動のま 書堂
融つたよふ此まのや大根
鉢やとく取しれいさるま 野坡
外送られたる青の土大根 西堂

炭俵

廿日休川石具

振うつれあられくまはる 儀
うりていやとくあつとく 野坡

うさ

番通う扱の小節成読りぬて 孤屋
行元ふよ力成るるうれ 利牛
好おの候と後さぬ秋の風 坡
つり木の安と個の家 蕨
細の者通つとみ声うけ 牛
里とへんえに二十一日 屋
いころれい時よ軍計大事し 蕨
気氣の雪よ報候もせぬ 坡
明きくむぢぢ地灯と吹消しと 屋
肩痺よしる湯屋の膏茶 牛
上置れ干菜刻もくはれとら 坡
馬よ出ぬ日以内て魚とる 蕨
約買の七つとくう成書候て 牛
候よ門あふ五十五なるえり 屋

は晴の倭鬼もも城をるを花 兼
砂は暖のうつろ青 州 坡
新島の糞も落つて雪の上 屋
吹さられたる釜とくゆり 牛
川越しれ帯しの水とあふる 坡
平地寺のうを死救垣 兼
干物と日向の方いさせて 牛
塩出と鴨の苞同くくふ 屋
き安用小うとせとたつる系柱如 兼
まうと沙汰かふ娘 兼 坡
くくくこと大晦日も四の種 屋
を筆の好む状の粒は 牛
中よくて借字合の借き 坡
壁とたつとて庭甘ぬ夕月 兼

下り筆



風やきて秋のかもめれ屋さう 牛
程のつ子の徳をいりゆる 屋
ちうほらと柔の揚場の嵐 兼
同黒糸りの連の糸ちま 坡
どこもかも花の二月中時分 屋
蕪炭のちうと拂いま 兼 牛
炭儀 兼
雪のねをれ口又ははるを 兼
月の出る糸の糸をさる 兼 孤屋
下者と一舟信うらあけて 兼 芭蕉
方ととふく大名の供 兼 子珊
身小あたる風もふつ 兼 桃隣
栗とくくれて度と 兼 利半
慈谷の境をれたる 兼 水 益水



秋風

おこーらーて 籠ふー賣る 野坡
 二とるる海浜もふ門の服 罽
 馬のそのおのさるす 丁 拍 沾園
 井の皮雪結に替る夏れ来て 石着
 稿よまのさともあのほりし 杉
 子あ者の一人もさぬ浦の秋 坡
 うつこよ風のこやる 壺 区 利合
 骨しの方成うこらて 猿六工 依々
 脊中への目る兜とす 壺 桃
 葉むーられ 陰はく上よ 壺 珊
 川うう 波くは小船いらする 菊
 朝思うとれて 氣味よれ 籠 杉
 脊戸へまよれと山一り道 出
 おおといはく 藪しと 親がう 孤

下ノ書

とて集めてハ多かれ 桂進日 曾
 餅系と搦て 俵へこつり 匹 桃
 わさしこせて 葉代の礼 依
 雪舟てふくはと 自懐とれらじ 沾
 隣へりて 火成とりて 来る 珊
 まよこけさも 俵の成て 樽を 啗 牛
 損もつらうして 賢と 教く 杉
 大坂の人よと されたる 壺 令
 酒成とやれは 祖母のまよ入 坡
 とくけぬる 街前の 蒲ねて けり 無
 次の小教成て けよむ せる 声 牛
 約束にやきて 居るの 牧に 食し 曹
 七つの 種よ 加勢 守よ 来る 杉
 妻れらあわさし 山内は ちうきて 桃

男六つこよ達そろり由る出

鄙懐帝

水仙のこるるはまはけり

空の細月よむらくま且 查香

我猫も時も猫通ひつ先て 芭蕉

予こそれたる病 漢の力 龜仙

初衣よつぬ絲瓜のひと合 千川

仁といこれてつらる白鳥 執筆

舞入は茶素ととのうをうて 香

急よ古風の残る奥とどろ 蕉

あししたちさき付てきゆらん 仙

取もたかしく育つぬれも 通

斤里小持つてさる布とさる 蕉

無そかへまくるる力のそ 香

下書

そめしと葉度かしの葉のま川

一群あろる雁の朝 塚仙

おふしの怪屋やまをるおりの 通

乱より後いさしぬ年号 蕉

猪猿やま下小又時はたの奥 川

雲の今夜とやうくるまらうせ 通

けるの上とさうれた世にひらて 蕉

彼岸小いとと残すゆあり 仙

りまふ小中お我子よ似るか 香

えぬおもひの志うく 海 息 川

え結のほつれておくる衣ら 通

人の情成つたへ 蕉

けり出つ我さく秋の意いさを 仙

院代中さこのこと本名は梅屋 通

月の者亭を至るを持出よ
栲たる舟の底はらりけり
唐人の志をぬきしはねて
出りゆく俗よ身とつる僧
相立しきもいころこえぬかり
憺の衣がけしうけむゆき
のけ不のハあけ上りたき毎
のりともかいらはつる青柳
通
花さうし掃う舞と歌を
くくいと持入中と化のこ
鄙懐帝
并焼やとそ物の田舎の初水
挙りてまゝ一即産む
濁子
徹下は指とむらにありて
涼葉



下ノ書

わしとむむくくは枝の本
うを力取干綱依のねまく
ゆくむ牛もええぬあそ音
嘉嘉の小村小証状たれ入
獲のそよのころは連縄子
求食花入唄の娘はく
撫こひくちふあぬる系
月内うい孫よ吸尚燈を
和田孫又とも指さる葉
鯉乞のまていふ葉は荒る
余ふよりうたれた力の枝折戸
子
はくろくとあはれは履いて
ねもこくこもあはれの枝
富いふ不命くたう花の
子

破の影いさめぬ雪のりさ
雲國ハ美すて馬に紫うれて
日記はすうし一帖の紙
後癢やふれた五月の紙あり
ふおりの紙かせく安氣の紙
青信ハ又ふらぬ伯母の紙
元糸本一の酒の眞殿子
焼たてて屋小籠の紙あり
ゆきまきまの紙あり
おりの紙ハ仮り法をまに紙
うれたる紙の布て紙あり
ふらぬととやう紙あり
茶葉壺と茶の紙あり
紙あり

下



湖水ししむ湖の朝雪
うた雪のうはまの雪のり
儀の草紙たたくる紙あり
おる花よるのする紙あり
美ねるのり天の紙あり

寒菊隨筆



芭蕉

雪の草紙小籠の紙あり
さけてうらむととふ根野坡
ふみこいさる玉橋をうけ初て
門は魚出を力のみ
雪のりも秋の目くせの紙あり
此一谷と粟の紙あり
七十小籠の紙あり
こく通る紙あり

すししと原野の出勝く見え
蛭くる半の葉肥やとむる
葉深き寺の甲のくちら入
そとよしとる縁のま外
とく後ろ降きの口は喰む
徳よ徳とつけて吐けま毎
田の中よほらせぬお年ほ
芝よ通はく力極ある
花の時程又いそがあれ
依て来い寸まの尾え
廣庭よまこれ縁深と川
遠ゆるるふのと後居
裏合せ根報のくくる縁の
まひの縁の痛むまえ

下

年去つて身は足程の追は
後て酒のむ糸曲の
とくしと板の風のあたる
橋ぬと人の縁糸てま
かえまい親よ不足れま
こはまてと縁いととり
後よとるあまよけうの
仕付てととら知算才の
田は極る向ひ道江のま
天氣よふあしと神の
續猿蓑
振まればもれたるまの
日なきとれと静か
水かろく池の中より及
支者



佐園

藤井まゝしる葉といたく 推然
難うあつふとやこしれの月 蕉
通りのふとふと世たる秋 考
直仕を舞 居て連つ箱の魚 然
直麻の癖状ふしうりう 蕉
舞うまてうりもせとに物強 考
中回りの状の居た右 然
朔日の日いここやら振るれ 蕉
一重羽織う失てたつぬる 考
幸とんしね青ふの只れ披楓 然
山と門ある有明の力 蕉
お嵐留の人のかけまじり 考
水際いころる溪の小綴 然
又て通る紅之井の花の咲かす 蕉

下ノ葉

居持ひとりふいとく 氷き日 考
おち風の又西よりわよかり 然
わつちるに脈をたふ事からく 蕉
後味の肉まは今な屋をくら 考
喧嘩の沙汰しむとせれぬ 然
大せつお日う二日ある言れ後 蕉
雪うとこけけー中れとろ左 考
まゐる程のまうけいれおれ記 然
奥の世並い近年の催 蕉
胸よりし肴のやを死月えしと 考
志難改を座の心 自然
定まらぬ眼の心とさけめ 蕉
藤汗のどすうと朝うたの夏 考
も花がほくらことおれおの風 然

大工はうひの奥よりすゆる蕉
米菴もくくみりとして帰る者
かゝりて市の中を押合ふ蕉
けあふり鉢は花のけもふて然
野のあつたのまごねけぬる者

俳諧集



いささききり居るはれふ 芭蕉
なうれの歌り小松く水州 估圃
者くつれぬ居るく戸とこして 馬寛
之味せんさける様のと食 蕉
ゆふ内おそき喰ふて使らる 圃
食こそくる秋さむさあ 寛
を路しもに誰ら訪るく下路 蕉
火黄の葉の歳をかさる 圃

力ぬく肱ほそくしうに思ひ 寛
縁入甲斐もふさふ本給お 蕉
持佛堂六るを交に出る人 圃
あつたは参て参る難難計 寛
けりの後十二日の相揚あり 蕉
伏見の橋も糸の名給そ 圃
懐へたくとて入る夏時織 寛
親仁くくともかかこめ 蕉
月花のそくう仕込むを 圃
陽をたちて解はれまき 寛
海氷のそくく落るまれ丸 蕉
門のたりの見さるいと 猿 圃
時の方小一村雨のふう通り 寛
菰より菰菰は出たて 蕉

鳥てふおほとそちのまれこも 圃
雪の細江の山をとり巻く 菟
今にねえぬしの外 鹿 圃
佛前前成并ハ後とも 圃
黒須の小蛇ハ襟のちるを 菟
呉海の系碗と壺に出る 圃
かま弾の二階成居るはら 圃
力を隣小癩痲ださく 菟
行くあの一審足ゆる花すれ 圃
晴又酔うる抽玉の切瓶 菟
秋の空をひく下る猿初者 菟
奉加帳ハ附ぬこく 圃
不公儀ハ花さく山のぼく 菟
田舎の谷よふやるうさひ 菟



下ノ巻

おきや水仙のまふれたらむはと
あゆも二十日ふじしかられる

え保七年

まきまよふとやいせの如俊 杉風
とちれくのうみ算紙ん箱の海老 孤屋
月下も中のごとや平れぬ宜 野坡
世ねの親のふてくるはまが 岱水
食積や本弓の匂の捨もの



其角

年たつや家中の礼は早刀取 介我
草紅梅残たむ 岩倉
まも雪茶屋のまぢやかろ 枳風
山より又くらくられの町 彫棠
ひとり只身を控えて 彫棠

改より叶 丁に秋よりりる 横几
有明よりすれ緒のさへもの 芭蕉
帆と八合より紙のさへ 仙化

鄙懐帝



涼葉

叶のさへより緒の非成よりりる
了て雪の雪よりぬこゑ 千川
門番の麻糸よりむ力かえて 芭蕉
今朝むよ初る糸裁の持 宗波
秋風より逆とたり 表を神 此筋
ひしも雨おは目覚後ふる 濁子
肌をく瘡のうと下ふし 川
よかふ雪か付て悔り 葉
渡寺の老尼はひより髪和子

下ノ卒

奈良ハ津の内ふりてあり 蕉
掛きたと小袖のうひはり 筋
金の意扇成周のかくさふ 川
又る意は源氏一紙の夏より 葉
控てうとせやとを僧正 彼
出来合も伊世の料紙ハ麻相と 蕉
裸足てあましく肉屋の 砂筋
初方よ花のさへり物せつたて 川
日乾の夏の手はりたき 葉
石をむむ表の奥のさへり 筋
地取りの株よりさへり 蕉
う近ハ庵より麻のさへり 葉
寺のひより四五互の 秋川
ゆり方より植まふつと出た堀の被 左柳

アハルカガヒと燃れし軒葉
先づハ去儀靴の一繩は蕉
若て居る内は惟子の下ル筋
うつふとて糸を寸歳はさかり川
あわれまもふと講の歌目柳
三条の橋より西にうらむる葉
茶屋の二階の酒の樓閣蕉
葉し紀向も大より年ふけて筋
恨の文を流るる琴のよ川
くれまはみまこの月る塚の上蕉
さるまよとまむさたんはく葉
諸雲雀のよ日成しけに舞うて柳
花より花とふとるうせそ吹葉

炭俵集



丁酉

梅う番ふのつと日の出の山法師
こころしよ維子のつなは野坡
家雪は残るまのよ遠に雪は
かゝの候はあつる采の連蕉
雪の内をくしとせ力の雲、
寂し一巻を秋の淋しき坡
柳頭へ采もらへるくさうさ、
痕残かたう人よ直せぬ蕉
系良通ひ日しほるある細えま坡
さうしつゆのふくぬた月蕉
瓢たる味もろく小きる向岩坡
ひととま出まふ袋のこと蕉
あもまうら尾の持病とまこか坡
ふんこやくさうさるる名有蕉

狗脊うれて肌をくくふる蕉
波挿もこころへ風は吹れう
孫ら流るる祖父の借抄
願とよりよりてはうる様刀
篠松志まつてはや篠の隈
約束の小鳥一とけ賣にきて
十里こころの余ふ出ぬ
笹の葉に小路握ておろる
あふ海うるかたの虫付
いつくはう後ははたふた
やうとやう出に糸の足連
有明よあくる花のたて
又幸よそろふ初のとへは
春を及やうあれはま

伊勢の卜向よへりたりと
長持に小傘の仲ろそつと
くつとそつと穴のこれるま
禪寺小一日のそふ砂け上
観の角のこてぬ貫 穴
演出のまに儀成くく
かまぬぬまのかくは内
有は又係孝流の折ころひ
籬の葉の名ふふこま
むきて来て栗しえは本む
伴信はしるがのこ
削やうと長刀板の冬の風
かうまに甲のこはれうれる
引きて無理よ舞をふ

そつと火入おとし 薫 流
花いとや 羨らぬまのたれを
漱くらのほろか けろの 水 里 竟



とれあふ柳のこころ 志乳一抄
五柳の流まきたる 流下抄
くろくろや 柳の葉つらふ 柳の葉
秋ふぬぬ 秋ふも 出ふ 初風

上飛

比つ五葉の枝いぬ 花えんふふ
本うられく 茶梅もはくや 時子
うれ花やうくく 柳の及こし

茶梅



紫陽花や 萩城小庭に 別あふ 芭蕉
うれるあひは 作る 茶 俵 子 珊

朝日の 朝の子 夢れ 声や して 杉 風

出雲の 相も そろふ 秋し 桃 隣

かんしと 有明 花を 花 柱 八 桑

指 握ら けて くるも 又 来る 蕉

径うくて 位 折こと ぬ 破 竹 珊

とくしと 吹 浪 風 の 音 風

美 堂 葉 羽 織 ぬ きて 仮 花 隣
かこと 秋の 身たし ふと 秋 桑
高ひも ゆるりと 内の 納りて 蕉
山の くりと 下 市の上 珊
草 叶の 法いて 八 枝の 気い 風
ま 日の 方にも 未と 細と 秋 隣

秋来ては畑の土おのこれて 桑
 ぞく雀の羽の生へそくし声 蕉
 ありしと足の上へこられたる 珊
 ひらたい山のあたちちち 風
 正月のとちちち 柳の今雇 隣
 澄たる俵とこたか 取 桑
 豆の酒を味てく 酔のほろを 蕉
 五つのおれに降る女 房 珊
 け際も利上はうりにまじし 風
 ちんまこと今朝の鞆と糸出に 隣
 結構うさうれをけふ切入して 桑
 又せより奥の家ハ引とと 蕉
 とうりけて今年いとうと盆け方 珊
 中くそ花もふれきまのまは 風

ちんま

采栗けきこつとくし 隣
 畑のちんまこつとくし 桑
 いそりまき一田はいて 蕉
 糞くむ匂ひ隣さうあり 珊
 今のろろ小きくく 風
 日雇の五番城 桑
 扈從流所茶屋の 隣
 小舟城はなれた 華
 鄭懐帝
 徳のちんまこつとくし 桑
 牡丹のちんまこつとくし 千川
 むーうおも力いさうぬれし 京葉
 登ふとてまは花とつとくし 左研

徳と君日芝所代も和を多し
 扈從す 畠田のこつとくし

三葉

雪よりハ葉ふ馬の冬も川
出はくまの山の 杉
吹たへを扱も親とこの社 柳
いつも茶をよめる鳩の家 葉
大のふれ歩くぬほと旅肥て 青山
稲をの 田代借りふくをや川
流はと曹洞寺に夕法とめ 菴
願のひびとふりの日る方代 山
生あうら餅ハ終ふ作られて 葉
實子出来せはまつましく 柳
順礼の帰りに様のおうごり 川
とくくはえは傳へ 脈さし 菴
たえんとふてるふ丸の暖うう 山
ねハハ柳よさるる 葉 葉

下ノ葉六

妻ふる臨秋の宵は意深の 葉
もてあうらへたる行器の鈴 此葉
陽上りの流衣下る方と行ま 葉
雲の破きよ入るく山 風 柳
さへさふそそみ露甘いきと来す 葉
雪のまうたの何時のやま 葉
萩畠年貢の葉に菊をへて 川
酒屋の門をたくく方の叔 葉
人足の貫目引あふことつみ 大舟
團とよのきてまをこせたり 葉
叢と日ころおしひー死心 糸
降りおとるよとこく暖はき 筋
随分のこころは夫道と信じて 柳
穴おのやとこー門の金物 舟

虎背より治川ちうに浪は声
吐しとこれに休む草 取川
けまいつつよりきり花のうけ
姓のたのこんゆる 苗代系

鄙懐帝



風流のよこと成鳴やむと云

涼葉

縁のさらち山弁の花の雪 芭蕉
砂川よひと夜又釜の傾とて 青山
門遠へこころ 警者此藤相と 曾良
方のおいんあぬたも静と 濁子
白丸西此も今い涼しと 嵐蘭
庫裡焼のほ城未たる 盆中 出水
ぬるま一つこのをい六 尺 曲筆

下ノ空

三つ目より人もきこむと云 嵐
心もあるに候名よと云 葉
け焼と屋とく 秋夜か合 蕉
本質とよりい 不純をにとる 如誰
入新も細そ花言理の朝か方 良
位とよりよてや 字と人 山
蟬よ隣ハ白成 掠出 ぬ 翠
小筋の文成 送る村 子
この花よ判官殿やとめけん 蘭
寺のくれ未成かうん 雪水 岳
入物も田畑よ似せて 井 葉
信るとすけけんを 食成 雪
長うぬ髪人冬 春の責り 山
可き年られて 隠居る 蕉

雲を出て土器うらと進ちし 蕉
たし系中ふかそとえりり 店
井つりのひつりしては流し 蕉
味もこやんて気な程ふる 店
奥の院とりのし花とに配 蕉
今朝ういひの雪の雪く 店
表の日に産屋の世のつりこ
かろしや湯漬喰らん 蕉
いそつりしこれ股立成衣並 店
月ほらもこりな暮らふく 蕉
あしひら^舞標こやに目くらめて 店
併の本地とほむ糸たて 蕉
ころしと白挽出せばはとん 店
そくろにまのともる井 蕉

下ノ巻

羽二重の赤ころやそにあがひ 店
着いぬく非せりする 蕉
新成すこ益すれ今福分 店
畠いあれて山久寺のこれ 蕉
日えへたんうう下を秋のころ 店
くれくたのひ才の 上 蕉
ゆへ風は蒲生の家もぬれり 店
物よせとやとことろ天目 店
たのたろ中ハ花山とあらつて
森言りふ黒谷のそち 蕉



たつひとひるは川の産也
たつひつりて

常事年数と老と 嘆

五月五日 高田より上り

五月雨は鳩の足袋とて留る

然り

刈こりて麦の匂も宿の内 利平

麦畑やあぬけりてははる中 野坡

浦のせやあつらひの境のくれは原 位水

丹波ささてたけははれく

川原ささくはにさくられて

麦の穂きたたふはつらむい

張の路やうた摘み茶のふはひ

崎田塚本氏

五月雨のそよ吹流せ大井川

夏れ方居油さう出て赤坂也

下り

夏日記

高田より上り



水鏡つと人のいへるや佐を泊り

苗の糸をよみなけ 世露川

朝風よむらふ合宿と吹たて 素寛

進子の内へくくる生もの 庭

うつやよは暖簾せうり方の秋 川

くもきてはる採もの多 覽

耕作の幸試うしる初めは 兼

至腐あちかこ 信濃街道 川

尻あの子くんとごころに破る 覽

ふの除る日杖土付ふまうり 兼

飽飯の糲よらうむ蠅の足 川

蒲葦萌あけて門ふひろる 覽

砂川集

後柿舎

半流と村のこころ五方雨

譯

青きふくさ切梅祖の花 去来
 一枝のひらくに道おし合て 芭蕉
 柄もこころも古き服 指 惟然
 力教よ芭の海鼠の下ろく 大州
 堤下りてい田の中への道 交考
 家しいふよ牛糸の間を 来
 活弁ハ力よ十五登あら 竹
 秋もや今相くさる給け 然
 雁より鴉のこやくまてや 野明
 抱込て松山ひろれ有明よ 考
 あふ人こよ真ふさ死あり 蕉

下ノ巻

雨乞の志ちうおくはけは思て 晴
 傍草をこころに掃箱のうら 然
 極楽てよれた居ふ成たのせり 竹
 春ととかなうら世経はる 来
 道もふさ畑の祖の花さかり 州
 中なる成籠子のびる明の 考
一二月舟の浦
 穢紅の出水よ下るうと震 明
 塔よのほりて清る白き 然
 賣よまらぬ旬握てとむらん 若
 茶の雨のせいさくも借 竹
 この頃の上下の流の居が 来
 腰よ杖をとる者のま 蕉
 葉ふとふ夕風の形けきとて 然
 ちりしものわらう初々 明

朝の力起したとこ五つや
まふふふふふふふふふふ
蓬生よおもしろけつ伏之松
かけんをせける湯後の桶然
生来て来る青下保氣に今
伝はけりし多ふ髪結竹
吸あてたあまの雲がませたり
肥後の相場が又きてん
袋口も花又の連まそつれて
日くせよふりしまのる風
市の菴
抑骨折斤為いとし初志風
方引控るる道中の得酒堂
即ち雀里より家よ生あつて
去来



下ノ書

極うけ候ともふるるり
力あつらふふくむぬり
小綱うれて砂は照り付
上は忌てそくは陰く
も桶を入る法通りの松
癩まも食いつのこくにて
大工の敷ては据が備る考
牛戸桶の水汲うる庫裡の先
たよりを待てぬ酒利を考
ふく出もあをう雨のま
魚く止まあるせんそく
歩艱と履と鈴と両方は
あまてうと櫛の本の森
力花よふと門とあつ入り

巢おろを兜の登る橋板堂
陽堂に眠まつたる医者の供筆
我々の香のほつじとある焦
斤の溜りとう川と指さして堂
迎たたむ明日のふれ場来
うと雪の一たんをいふはり考
卿前ハ志人と次の田楽燕
追々との細と嵐のなつたを堂
隣のぬをあげしんやう牛
草乳の跡で経續む道公坊来
を掛控ておるは牛の考
川に流れてまを死あうは焦
岩よのせたる田上の産竹
正方といふ平れは淋し北日と堂

下ノ七十四

種漬よまるとりの名代来
嘆ろれ日行つた妙をいふ繼牛
彼をたうけてお原叫く草
ふ粉とぬまとも下代ま鳥考
役者ともやうの衣の薫来

彌波山集



浪化

嘗ふ朝日とにあり井枯子
乳者うけらるるまれ静と去来
平ふ入の土産似合ふこらて
又所のころよわろうふる空化
巨甕切らるるも道し言れ力、
ひろひふ我丸に借る来
猿入る錢を買るる田舎道、
かひこの真と六方の未化



常たる御城一とい引ちらし、
小屋敷ふらふ城の裏町来
と今のちよとと起る荒道す、
梅咲そりてさ花さすしと化
年中城ねの内より新裡くい、
伊勢の吹日いそうし紀去来
上緝の本綿合羽に傘はして、
陽屋のち透のハツネりあり化
名前のもやう互ふかきあひ、
一かてもふさと梨ふれ切物 芭蕉
玉味等の信濃よむる秋の風、
不足ふ寺はを雁よ持とり 矣
右のよれふるひは身に陰うく、
煮くけてやる相役の ぬ化

三三

けねねこめひて通る船の軒、
青田りのこしてうまのうせ 蕉
平りふるふ城あまら水場、
給仕とさせて馬まう食うよ 来
有らうねおの塩桶と星てる、
聖灵棚ハよはと 宮鏡 屈化
まのふら成涌よ出ると思せて、
来てうからうら去年の傍棠 来
急宮といハ盗もゆるしと化
うめと朝日にむり人換をら 蕉
蒼きたる松より花の咲こほれ 来
四五人通る信長宗あり 化
薪色町の子とこの新智能 蕉
いつしとまはさした世の中 来

朝露ふととれすし凡の泥
六方や峰よをかくありし山
清澗や浪ふちうとむ青松ふ

鳥之道



本節巻

芭蕉

秋うららるる此の鳥の道
まじらふふせる程ふれは由 木前
力跡るおふらの火乾すまで 惟然
起ると澤よ下る白鷺 文老
降るまじらる九雲とこれのまじら
浮れひらふいて粉細とをる 蕉
少飯と食いて隣の服とをる 考

芭蕉

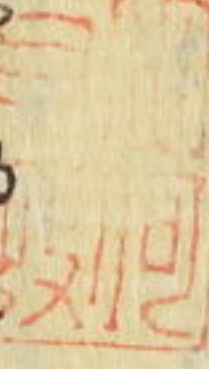
何の箱とも志化ぬ大死と 然
有して哉のかりの堂家と 蕉
うららるる蚕のせくるひらり 節
佛坦の隈よ力のかうわり 然
梁うららるるの落る秋風 考
ハ朝の礼いそと(仕春り) 節
舟の籍の時ふらうり 蕉
西の遠い地早ふあは出る 考
おありよとら 王途春の州産 然
後うけて細繩足らぬ花の垣 節
足袋ぬいて干はるる陽を 考
年れよふと記やつ供とて 蕉
原すたうととまふらうり 節
川花の上うりまうた顔と 然

多きよはは色とつとつとれく 養
才部ハ四面ハ雨成るやうに 考
井の根成りあつとつとれ 然
まつとつと系ハの批把とつとれ 然
塚と根よころに成こく 考
害ハこれとむくと某ハ巨魁の宿 蕉
正こととれとつとつとつとつと 節
餐後て番よ出る日の朝方お 然
木よ十とつとつとつとつとつと 蕉
備作を中稲仕あけて食あつ 考
桶もたらひもつとつとつとつと 然
扱うちとつとつとつとつとつと 兼
首よ物とつとつとつとつとつと 考
花まで葉つとつとつとつとつと 然

二七七

ほししの肥る赤土の岸 然

續猿蓑



芭蕉

夏のおやあつとつとつとつと 芭蕉
冬ハいんらとつとつとつとつと 曲翠
雪ハいつとの程よ音次入て 卧高
古ハ羊 巻よ反古ねーと 惟然
有糸の雪もちりよるをれと 支考
志やふて砂成なる雪とつと 蕉
端とつとつとつとつとつとつと 翠
山とつとつと名とつとつとつと 高
飯椀ふる面桶よとつとつとつと 然
驚てユまとつとつとつとつと 考
おのう事とつとつとつとつとつと 蕉
お伴の衣よ夕日とつとつと 翠

平畦よ菜松前立し一たを編考
秋風きたる門の居風片然
馬車で旅ハひそむる方の乾高
尾張て付しもの名にふる焦
解ぬのこころ此花をあつめて翠
正力その、徳もよことと高
去風ふ音清のにもりいとす之然
菽うう村へぬけるうう道考
食うのぬ舞も男もに利て焦
何その時ハ山伏よふる翠
毎芭と持よ附たることと箱高
巖ころころ卯力時くとも焦
お花と初冬に立つ夫木の町考
際の日和よ雪の氣をひ然

下ノ末

香ころろよとせぬ酒の引はれ翠
恙うのふ城船へあつくる高
射付しふ箱来たる方の言焦
そろし歩りく盆の上筋尻考
虫籠はる四條の角の河原町然
高嶽とあぐる表を固翠
今のろ小陸とえうく後橋の上高
大まね陸のらんふ守のゆる然
さうりふる花ころ扉おれをて考
腰うけつしー後橋の下高



香きよの屋よ松と橋のよ

涼しとやすしと花おの枝の秋
ひやししと雪とと雪とと雪とと雪とと

七夕中秋を定るけりぬのね

金倉

家ハこれ杖ハ白髪のささり
いふつ子方園の方ゆく五位の声

壬生山家



聖翠

つししと帯杖もろく板の毒部
井のこつれと初めしし吹 惟
朝方又熟さき尾とふつて 土若
とれりころ福豆腐るれ切 雪芝
大ハの通りうぬろせま小器 猿雖
昨迄の教ハ編笠も忘れ 芭蕉
瘦るうろ水仙ひくく川もて 貞袋
世中ハ半を保日とととと 九節

二二五九

蝶入の来て娘うれ門まり芝
杖と草履とどろりて 芭蕉
一ふくわきさきたる方又孰 然
懸釣るあり強念の浦 雖
不鳥のうろりて 因も細も 蕉
昔ま粉とろろ惟ふけ汗 袋
まふろくみまてたぐこせれ 雖
穢持子して祖母の泣く 蕉
らん丸ま花の本陰のつかく 芽
どこやうまをたまふれ 風 雖
様花屋にやむ存うつハむま 焚 芝
かうひのうろた子成養る 傍 袋
冬うれの九幸母ねむる 芭蕉
たふしとれハ居風呂の 漏 芭蕉

持陸の一方ふにさううひ
あはう洗うつらつらつら
言のい入るるれたる道具市節
葉のぬくころのぬるぬる然
やうあふいふいふいふ後味
こもに年よりあふさりの枝蕉
有ぬよ志はしつて馬と笠
き房時雨より顔痛やうたり節
引たそるち小してまき枝門芽
ひとりたまうにそこぬち外芝
あうしとせせんに付る貝から
いこりいふれはくく朝風然
とむしとそたのほら大も芝
柳にすしる土のさあ松袋

翠

後維亭



後維

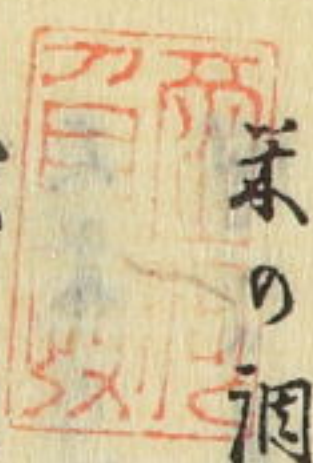
ら水くして糸ハ海リ野さうれ
雀のわーらとあろる葉の穂 芭蕉
柳方未駕ふやうやく退付て 配方
葉のりうたけ暖を屋のひま 望翠
かつたうと揚とあうれ雑水取 土芳
糸尾くうれ袴さうる 卓袋
燭差のふさた糸よのやたて 蕉
名主と地下とまこかろ判 雖
焼飯と割とも中の冷たさの 翠
たまひ糸さほ出ぬくうり 芳
そはハ麻の要仕あらふし 袋
湖水の面方杖えくうれ 芭蕉
服さうの小尻の袋と松さうり 力

角力よ一頁こころやともし
山陰の山伏村の一角よえ
くつれうさうの朝の葉の巢袋
焚きして柴とらうふりたのた
土うたうたまの風とち
作らうの川除の石はと上ケて
日あさくしに風とらうあし
大木の供の長この果もた力
むらぬの雲のおとる血れ道
一休の代きもて来ぬ酒の箱
たらしの庭ふさうとす
燈は並屋佃工のおい文に
鮑のききの扱もとのさか
くくくくくくくぬふ生てたご

下全

予がとひらの一たる三ヶ方
神主の御供と持て上らる
志らくく存よ体むた土
衣きて懐とるくは熱く
加部へといる葉のふん
耳多ぬたさうさうは横
刈るのころと雇ひ六又
大らうふ凡中実あふた
菜の潤子のたるむ二力

残る故よ拾袋てあうた
餅春ふううにえとる
ゆふかよひる桂は美よあ
うと材よよ笑る鶴
風書



雲芝

身とそいれ二人つぎ互在る 玄虎
こふちうけを 雲の雨の 苔藓
煉宣公月利の内より行舟て 蕉
けりてきくく門の鰐口 芝
大木の梢の枝のちむふり 麦
空よ麦とくくくく依お 芳
山伏は終つて来て配る 蘇
一里行ても宿をとる 猿 虎
かけおの布袋の息よ方て 芝
石の谷よくくくくく 吟 蕉
秋の雨やろくくくく川の上 芳
歩り 宿の 船とくくくくく 麦
又深山の 影ら花の 雲とくく 虎
とてし利あくくく 雲の 頌 礼 藪

下ノ全

き日目の西よ本たる 如目振 蕉
あれぬぬる雨のまづく 吟 芝
のこれぬや余ぬくくくくく 麦
案なく陰ふ持入ぬとくく 芳
寒牛の枝の節よむ老のく 蕉
きくぬ山路とくくくくく 虎
言るより 寺はえ返る 高枕花 芝
とくくの陰よとくくくく 蕉
ひけふきや力ふけくくく 芳
露色のいこれとけくく 麦
おもし切る跡くくくくく 虎
句ひとく 紙よはくくく 蕉
名刀の花うとくくく 雷



足右よふもとの音や田のうり
を音これうりや方も十六里

斗後よ山はみかして

考るまはしつてたてしつれす山縣邦

山産のこちうて巧まの編斗後

俳諧集



芭蕉

松茸やらぬ木はまのうりつれ

秋の目おはまおてかこやう 文代

春のたけ魚の通と中程よ 文考

こころはうけて御のうり家 雲芝

四五人てまろずはまふれま 猿雖

いさうし弱よ轉は星よ子 望翠

今初の雪はけふもたつうと 惟然

下ノ分三

展風たぐんて膳をわらうり 卓鏡

あくしよ上の加茶のうりつれ 代

あまの流もそりの合とる 考

龍や蒲室のうりの気味もろく 芝

風よあうりくわハちの 雨 雖

いさうし死神もえいと茶室 翠

三年まてと嫁よみのふと 蕉

危きの白さの人もえらせたり 袋

歌もも果ぬ佛ありはく 菘

初冬の恒のふる井結もはく 然

通とろとろぬ力の脱と代 然

とらしと親まにふちの拵されて 袋

系う谷へも豆を腐りたり 考

年切のぞとい教よ角と入 雖

后風呂の湯のうり加けん子
二三本并切りたれかかると考
重宿の煙をふらふ番ふを
融不れてたふたる雪の融
花をついでと附一り仙
味香賣の膏ありはき後て代
本終成益よはとゆにり袋
ありめよか家の叔と應は也
花子細よとさるるあしも子
この秋は懐の腕とわつして
侯と俗との花のふらり翠
呵る何どよう焚付るぬ竈の下
芝切入て馬を背ける考
くねとむと行組山のふみ
雖

下ノ金

まきの日向は屋のまゝと代


俳諧集



秋のねねららあたる秋掛

芭蕉

力やうのほとい痛き身はを 車庸
西の心とれ三強雁鳴て 洒堂
ひらゆる牛のよく動くこ 游刀
舅の名やんまと唯ふま性者 諷竹
小袖成出るとは味たる大し 惟然
後やるまをこことおとれ 支考
こゝても医者のふんをいふん 蕉
掛ひと熱しの柱さうしと 庸
おて揺ゆる舟の 梳堂
乳より思谷うけて言わたり 刀
すいさうふくり飛はえらぬ 考

藤のこぬねは若葉う百れ損 然
 多幸の力よ細よ川 翁
 大蛇して葉隙を下る 誰う嗅 蕉
 七種すていよろつ 僅かき 刀
 えせ馬の若葉の 苗花やに 堂
 小屋形ふくぬ 金枝の 春 然
 密掛色 
 松風よ新酒とさすれおを 支考
 力もさふくる 恒の 上 猿 雖
 町の角^{イッ}退く 藤の 花こそて 芭蕉
 さては活衣の 裾と引とる 雪 芭
 世月としかほえと 小引とる 唯 然
 けふこりてはくく さらす 貞 袋
 春相ふるま 履の 尻の 切かり 望 翠

下ノ廿五

床て天雲 試ころし 刺 考
 表比を備し 雨の 袴とよみ 捲て 難
 喧嘩の中 杖を 理よ引の け 芝
 仕合と矢 擗の 舟とよみ ぶんと 蕉
 あふけと 旗の 旗れおつる 翠
 せうしと 信子と 舞よつれとて 袋
 大工家 根元の 帰る くらん 然
 用のある 時 けいけ 返教とあり 考
 雨の 降る 日の 節々 中や ちや 芝
 とハ 雲 試 直 連 して ても ね 引 奥 袋
 親しう 入字と 志して 幾 秋 考
 力 乾よ 又 くり 返す せめ 義 仁 翠
 備り たる 人 人の 跡の 冷やう 雖
 咲花よ 毎年 くらん 連 評 然

陽炎うけてはよれ抜けぬ 襖
幸と穽のはしりれ難きうして 芝
肉依の苗をにきくあはるく 考
送場の前をさへ入たるとは 雖
一里の舟も版のすこたる 翠
山をふ蜜柑の色の黄にありて 蕉
石ふれてかざる宙の影をた 考
母方に離れて方のはれ淋し 芝
嵐の巻る巻葉の 中一 襖
傍葉の髪を結ひあふ雨 雖
さうふ出とほと酒は酔たり 芝
小倉とハむりひ合せの下は冥 然
と交の風は人死りあゝる 考
水身と千日寺の粥喰ふて 蕉

下ノ分六

齒うけ足跡の雪小埋れ 雖
やうりに今い海よりあ留浪 翠
加減のらとりまのころと飲 蕉
淡紙をまらめてそれいまたみ 考
こほれて生る朝のむけし 襖
朝ゆふの茶湯をうとる業 雖
知い次第よまのはちほく 芝
花もせとふらとよかた楠の枝 襖
力えよいつも道能せらる 考
弩もゆるしとす。秋の風 翠
後の小家をとくる寄 西 然
懐よりわくまをくくけけ 襖
いこそこの齋よ白き齋煮る 考
雪限の窗よりめくく花の枝 雖

根笹はといは常のふく

刈秋やち成ひろける栗のい

あつて

菊の香やふくまいたに佛は

ひいと鳴る急悲し板の麻

くわりの流

葉の香まうりやる節自が

葉よ出てまうとかま麻方板



せう

芭蕉

外 夏てふ別かり方又うれ

秋のあらうに奥あつれえ 畦止

家のある野ハ刈跡は花まで 惟然

下全



いほもの癖よこのむ中服 洒堂
はころ小ふうて土菊さうじうね 支考
援の枝とわろうさたり 之通
溝川よほけおく冬成引てる 青流
火のとほうたる亭れつたあけ 蕉
其使

所思



芭蕉

は通やけ人ふーに秋の香

涸の島の木よめくる 葛 泥足

力あつむ書巻はめれよもは時て 支考

小よたあをよとてあ 飯 游刀

天香おね織と入て若拵 之道

酒て痛のとすう服くせ 車唐

かたはうぬ節白けをむまきり 洒堂

曠の底ひよふと梅爰る 畦止
線香もよそのまことの伽よふる 惟然
あ比頂の條の終る二方 龜押
兵の者も我いねうしれす 足
かくさた年にかしる松風 蕪
とくしと山岡の稻八さくれて 庸
地底の埋る秋いふふした考
仕るふさ身い糸にひる湖の力 道
鹽飽の糸のくくつと入り込 然
さるる花よ幕の芝引吹きて 止
水傍日もよ医者のもくも 堂



稔懐
は秋や何てくくくをねる

下八八

はれはくくくふされて

松風の軒吹らううて水はぬ

葉の巻



園女亭



芭蕉

あし葉の目ふ立てくる葉もか
ねふよあとなふに朝方 園女
冷しと朝の行身をおぶげて 諷竹
何れもせとよ年はられり 渭川
小禰よ座右の徳ハ嫌ひより 支考
と中こそちのてましの徳 惟然
あしたやう釋小張たててる 洒堂
袖ふさくより親の名代 舎羅
垣紙したちとたらふれして 何中

晋清の内いふ屋て大哉焚蕉
帰らぬよ極する娘のゆりをゆ
洞穿うして故早稲の掬 初竹
うれしと方の出る枚の森川
秋語引たる町や布の秋考
とれたやう霞うら運るは糸籠
披岸のぬくことれてかすす
青芝のぬよもいそらふはのれ
出代り時のまを歩たうかむ
通ひ法を模ふあうねい運入
まくらにふす奥の庵 桂川
あらしとまらた今にたきの茎
雪のくいのふよあう 風園
紫賣よ隣の子も連たせ考

下九

清露はよ板の去るむあり
上下の掬れ落たる川の青中
うる田の中と在れのはは、
小こすくよ不弓と程あふり
結の仕出りのしやろ中機
方教もきく昨をば板のま
杖を本と通の服さし
中
井うはのそれと世のぬら
老のちううに娘はしりる
係ちさる禍のいさうれ張さ
考
たうぬるこの積てのさぬる
園
田のうの位連におろそ花堂
堂
柿のさく本さくうのふり



人壽やけなうへる秋のふれ
秋もくやろつづく雨に力の形

花屋のくくも

藤よ病て夏は枯れどかけら

藤の病て秋すて語をよ

出る舟中

ふよ病て花物のるやを飛 去来

舟中

白露のけしきをよを飛

行舟

木枯のそらふはそや鶴舟

房つとやかろ水して針葉の 木節

起さろ声もうれぬ湯気が 支考

白雪もやこそなれん 佐々木 正秀

下辛

舟のろすたのこちりや松のうせ 之道

味と風鴨のさけりや伝とけい 支草

月たすしてとすんくろの葉 乙州

是りろに竹の林やととこい 惟然

吹井と鶴と抱う人時由が 其角

舟中

うつくやう葉のふれまろれ 支草

あつては次のろへ出るまろれ 支考



。花の愛身あつらふのそねくれ 勝延

秋うーほろく蝶のくつをれ

。山のさくら昔拾へん木葉くれ 塔山

。鳥よやねの巻に十一 露川

。やうううに禁よ今にね地麦

田種くくも小後の朝 起

。我もさか梅よの巻に夜つた 雅良

。茶の湯よのころ雪れひよち

。そねこと縁ねおぬあはせせや 如行

。古くやうの板のころらし

。葉程下はむしろの物や夕涼 曲奉

。ゆるる糸ゆるくちちとひの花

。そそ葉の隣もつや生大根 許六

。冬さー花る小窓の縁

下生

。ま風や麦の中ゆくあのかと 木登

。かけろいさむ花のいとに

。まろしとせとせとやと田植唄 巳百

。まあつたりん不破の五力雨

。たぐ屋もかしてま木の柄杓 露川

。小春よ首のうこくこのむし

。時よて平花まねる捨生 園女

。宿ふこころん成とむらこち



さうり



肌をくししてかりき紅る立圃
 秋の葉のこけむひう麝香
 ほろろく雲にたきねこや青
 かくはうう足の入る高嶽舟圃
 々へも一日輝の如く推青
 若ありと五里程出る家童子圃
 老いふふし十念とすの青
 水仙のさうとこころ神を方圃
 ね統かたす常盤あつりりり青
 登られぬ大内山の后、孫圃
 通くらししと郭へす青
 かくそりな尻松さくも川海り圃

下ノ年四

ねんてさく西り、さ青
 秋やての畑ふゆるら茄子圃
 花火とほして早を系、青
 傾城と横の中、純の力圃
 瓶の歩りく足音もな根、
 真篋寺と云へいそ名も醒に青
 附本賣やして漂る白、雨圃
 ね袋のねんじに抽たるもこれ竹青
 沙ると漬てすと不可思議圃
 精進もくひの延るね様もひ青
 都もやしてえる江戸の舟圃
 三ッ揃くむ老のあも志賀助青
 中とけしと戸と叩く風呂圃
 布袋とぬ弥勤某の化身、青

鯉のうろこハ三十六負圃
 仙人は本も事もうれ秋の力青
 その糸ノハハ本城菊圃
 ひらたのまはつてこころ柄わけ
 け川こえしうた人こまへ入青
 みらのくれま川の石もこまわれ圃
 かく控し世と誰いろ人色青
 花も名よふらこま加履ま歩夜圃
 能くしえうらうら砂の 松 筆

お徳撰吟

 翁

おのこれ名をえおまら序に
 竹丁の跡を 知てり 蝶

下

几中目のちうしようつらひて
 力行これい陸は備たり
 礎い唯あつたれ叶紅葉
 世とて葉山子を居し実守
 ころしとや陸の陽あつた
 霜小うけ出の爰ふるをこ
 一備やうこふのらけ森の中
 との取くくは消るはたうそ
 色しよれのくみれの時やう
 ちもかき川と本直流れて
 つれきて様とこ麻ふと丁の声
 力よまむむといとへ面うら
 かくやてのぬい君のぬいやうら
 んの水よこくく草 垢

竹原

花のれり枝を成るの住所
蝶舞へてうらり終に是
陽光の移るはるに離れ友
几帳なもたれいまをとり
得いこぬい位よふらいた懐を
久と有世よひと入ふし
うと身とて討との勢に交れ
ふりし心を追下と 児
床をそら何やら淋しき
記念の袖はほくか 指は
馬場殿の本様あられ小は續
核皮を積まよかへ入ぬ
朝もよひ紀貫之の三寸
額一行り朽跡をく

下ノ本六

かりとよばやうえくやまは花
屋のち後の眠さかには多
まの約おのれうかけおふう
吹雪の袖をふる人見身
松井の真加と買人くらの市
簞巻たるあうつとけ 霜

雪のつらさ

竹原



竹原

